

目的 短上衣のスペンサーは、18世紀末の英国に、男子服として出現しながら、直ぐに女子服に採り入れられ、19世紀初頭に大流行した。

本研究は、そのスペンサーに焦点をあてて、劇的な出現から1810年代末の全盛期に至るまでの変遷を追い、その形態的特徴を明らかにするものである。

方法 “Fashions of London & Paris”や“La Belle Assemblée”、“The Lady’s Monthly Museum”などの、英国で18世紀末から19世紀初頭にかけて出版されていたファッション雑誌や女性雑誌の記事と、そこに挿入されているファッション・プレートを主な資料として、当時の英国の社会的・経済的背景をも踏まえて考察した。

結果 ① 最初は男子服の燕尾の部分の切った形の上衣を、考案者にあやかって、スペンサーと呼んだ。しかし、その当時は別な名が付いていた様々な短上衣が、しばらくすると、スペンサーという名称の中に包括されるようになった。

② 薄地木綿のハイ・ウエストのドレスの普及に伴って、外出時の防寒着として着用されていたが、次第にその機能を失い、春から秋までの上衣となり、真夏にも着られるようになった。

③ 袖については、当初は袖なし、半袖、長袖と多様であったものが、1810年代になると次第に長袖に統一されてきた。しかし、袖幅には、依然として様々な変化がみられる。

④ ドレスと同色、対称的な色、あるいはドレスと共布という風に、素材の色は固定せず、衿の形も多種多様なままであった。